

『いったいだれでしょう』(マタイの福音書 24章 45-51節) 2020.7.19.

<はじめに> この世界はいつまでも続くのでしょうか。近年の様々な現象・出来事を見聞きすると、世の終わりが近いのでは？と感じることはありませんか。聖書は、この世は終わりに向かっていると明言します。その時に私たちがどう向き合ったらいいかを、イエスはたとえで説かれました。

I 世の終わりには

① 終わりのしるし(1-29)

数々のしるし(4-28)は世の終わりの前兆現象に過ぎません。それは苦難の日々(29)と言われ、その兆候に気付く人もいれば、目を背ける人もいます。声高に救いと解決を叫ぶ者が次々現れますが、群がるハゲタカの餌食となるだけです(28)。

② 人の子のしるし(30-44)

神に造られたこの世は、人の子の到来で終わります。確実にその時は近づいていますが、その日がいつなのかは、誰も知りません(36)。ですから、目を覚まし(42)、用心するように(44)と、二種類のしもべの姿を引き合いにして主は促されています(45-51)。

II 時への認識

① 主人が帰って来る時

二種類のしもべは、主人が帰って来る時への認識が違います。いつであっても備えている者には報奨が、遅延がまだ続くと思ひ込む者には悲劇が訪れます。人の子の到来など無い、あるいはまだ先だと思ふ人は少なくありませんが、思いがけない時に来られます。

② 時は誰のものか

しもべには主人が帰るまでの時間が与えられますが、帰る時を決めるのは主人です。それを自分のものと誤解したのが悪いしもべです。時は神のもので、私たちはすべての時に主の眼差しを感じ、主が時を司られていることを認めて、委ねているでしょうか。

③ 主の日への思い

主が来られるのは、私たちが裁くためではなく、救うために来られます世の終わり、人の子の到来の時が近づいていると聞いて、私たちはどんな思いを抱いているのでしょうか。その時が来ないように願っていますか。それとも待ち望んでいますか。

III 任命への認識

① 任されているもの

主人はしもべに任務と権限を与えます。彼らに食事を与えるために任命されたのです。私たちにも主から任されているものがあります。何を、何のために任されているでしょう。それは重荷ですか、それとも主の期待を感じますか。

② 模範は主

時機と相手にふさわしく与え続けるには、忠実と賢明が必要です。そのモデルは主人です。手本を見続けることで、弟子は成長します。主がされたように、主が周囲に置いてくださった人や物事に向き合うのです。

<おわりに> 主が来られる時は定かではありませんが、必ずやって来ます。イエスは救い主として来られます。それは恐いですか、それとも希望でしょうか。そこに私たちと救い主との関係がにじみ出て来ます。(H.M.)